

報告要旨

報告1

「平等の価値」

井上 彰（いのうえ あきら）（日本学術振興会特別研究員PD 東京大学）

平等が政治哲学・倫理学における重要な価値であることは、疑いようのないことのように思われる。しかし、その価値がどのような身分を有するかについて、詳細に検討した研究は意外にも少ない。そこで本報告では、平等に内在的価値(intrinsic value)があるのか、あるとすればどのようなかたちで平等に内在的価値が見出されうるのか、といった点について検討したい。

具体的には、第一に、平等を個人的価値(personal value)としてみる見解 (J. Broome) と非個人的価値(impersonal value)としてみる見解 (L. Temkin) を比較検討し、平等の内在的価値を証明するには後者が唯一採りうる立場であることを明らかにする。第二に、平等が基本的価値であるということが、(Temkin の議論に抗して) 単純な平等一元論や多言主義的平等論に回収されることを意味しない、という点を明らかにする。第三に、平等の価値のあらわれ方について、パティキュラリストや S. Kagan の見解等をふまえつつ、levelling down objection を題材にして議論する。

報告2

「イングランド宗教改革下における宗教政策と教区教会 ——シュロップシャの教区の事例を中心に——」

山本信太郎（東海大学文学部非常勤講師）

近年、イングランド宗教改革の社会史研究において、教区というフィールドを対象として、宗教改革下の教区における多様な変容過程の解明が盛んに追究されてきた。本報告があつかうのも、ミッド・テューダー期と呼ばれる時期の教区教会の経験である。ミッド・テューダー期は、短期間の君主の交代とともに政府の宗教政策が二転三転した時期であり、当該期に教区教会では何が起こっていたのか、そしてそのような教区教会の経験がどのような意味を持っていたかを考えることが本報告の最大のテーマである。教区は民衆が直接宗教生活を営む場であるとともに、教会行政の最末端の単位でもあり、各治世の個別の宗教政策が教区教会でどのように受け止められたのか、といった問題が考察の中心となる。

また、その際具体的な事例としては、シュロップシャ(Shropshire)の3つ教区、すなわち、ラドロウ(Ludlow)、ヘイルズオウエン(Halesowen)、ワーフィールド(Worfield)の3教区を取りあげ、個別の事例に深く分け入ることによって、上記の問題を追究したい。主要な史料としては、教区委員会計簿(churchwardens' account)と呼ばれる史料が用いられる。